

装備品関連調査に行ってきた

ーナブテスコ株式会社（装備品メーカー）編ー

1. 背景・目的

経済産業省 産業構造審議会 航空機産業小委員会の議論を経て、2024年4月に「航空機産業戦略」が発表された。この中では、航空機産業戦略が語られているのはもちろんのこと、完成機事業創出ロードマップが示され我々産業界にとって大きな指針を得ることが出来た。「航空機産業戦略」の中では、ボリュームゾーンにおける成長の一つとして「装備品事業」が取り上げられ、「現時点では参入が限定的ではあるが、その付加価値の高さから今後の成長にとって競争力強化が大切である」とまとめられている。2025年3月には『「航空機産業戦略」の実行状況について』と題して、「更なるサプライチェーン施策の必要性」

の中で、「サプライチェーン現代化検討会」設置が明記され、「機体構造体」「エンジン」のみならず「装備品」サプライチェーンにおける課題検討が実施されることとなった。

そのような中で装備品メーカーの製造設備調査を行う機会を得たのでここに報告する。

2. 概要

調査に訪れたのは、ナブテスコ株式会社（以下、ナブテスコ）である。今回訪れたのは岐阜県不破郡垂井町に所在する岐阜工場であり、近くには垂井工場もある。垂井町と聞くと皆さんはピンと来ると思いますが、美濃の国の元々の中心地。美濃国一宮の南宮大社がある場所の門前町、豊臣秀吉の軍師として



ナブテスコ岐阜工場の入口表示

活躍した竹中半兵衛ゆかりの地、天下分け目の関ヶ原の戦いが行われた地、そして『桐島、部活やめるってよ』で鮮烈デビューし、『何者』で直木賞を受賞した朝井リョウを生んだ街である。現在の東京からのアクセスは、名古屋まで新幹線で移動し、東海道本線に乗り継いで、大垣の次、関ヶ原の一つ手前の「垂井」駅で下車することになる。

訪問した2025年5月16日（金）は雨も心配されたが薄曇りで、当会佐藤常務と共に、南宮大社にお参りをしてから、徒歩で向かった。現地では、弘津工場長以下にご対応頂いた。はじめに、中崎調達部長から会社紹介、事業紹介をして頂いた。ナブテスコは、帝人製機とナブコの統合により2003年に誕生し、20周年を越えたが、この間に売上規模を2倍にしている。売上の半数近くは海外であり、「うごかす、とめる。」モーションコントロール技術を利用して、世界シェア及び国内シェアともに上位の製品を多数製造している。航空関連事業は、1944年創業の帝人製機が起源となっており、防衛省向けの油圧機器の製造に始まり、Boeingの767からはTier1として油圧機器を製造し、1990年には、777のTier1として、フライト・コントロール・アクチュエー

ション・システムを納入するようになった。米国ワシントン州にもBoeingのエバレット工場とレントン工場との中間地点に自社工場を持ち、Boeing工場への納入を行っている。現在は、岐阜工場にて500種類にも及ぶ航空装備品を製造しているとのことで、製造個数の多い航空部品もあるとはいえ、多品種少量生産の工業製品と言える。工場見学では、久米製造部長より自動化設備を中心にご案内頂いた。Boeing 737maxのTier1として、フライト・コントロール・アクチュエータの製造を行っており、約500個／月（8個／1機）の製造に対応して設備構築されている。特に製品のパフォーマンスに大きく影響するコア部品の製造技術に関しては、自社内で実施することを基本方針としており、表面処理及び精密機械加工については新たな工場を建設して、自動化設備の導入を行った。

MROに関しては、OEM-Tier1の立場で対応しており、日本、北米及び欧州の3拠点から全世界のエアラインへ直接対応している。ナブテスコ事業内容の詳細については、HP (<https://www.nabtesco.com/products/aircraft/>)でも紹介されているのでご参照下さい。



自動化設備を導入した新工場外観

3. 所感

今回は、装備品メーカーの中で自動化が進んでいると言われているナブテスコの設備状況を確認した。自動化を推進することで効率化・省人化を図るとともに、今後、生産レー

トが向上しても追従可能な体制を構築しつつある。当会としても装備品関連の製造設備が充実するように引き続き応援していきたいと考えている。



久米製造部長（右端）より工場説明を受け（左端：弘津工場長）

〔(一社) 日本航空宇宙工業会 技術部 部長 福島 明〕